

鈴木 美弥子 (学校教育課程・教科教育実践選修)

### <序論>

#### 研究動機・研究目的・研究方法

筆者は高校からハンドボールを始め、7年の付き合いとなっている。ハンドボールにおいて「投げる」ことは重要な技術である。言葉では「投げる」と一言でまとめられてしまっている投運動だが、その体の使いかたは人によって、用途によって、また競技の特性や状況によって似ているものとそうでないものが存在する。「投げる」運動に似たような動きかたをする運動の共通点と相違点を知ること、今後とも関わっていくであろうハンドボールの指導の役に立つだけでなく、類縁した運動への指導の手立てにもなっていくのではないだろうか。これが研究動機である。

研究はハンドボールのステップシュート、野球の捕手の送球法、バレーボールのフローターサーブ、バドミントンのスマッシュ、テニスのサーブの5種類のスポーツ運動を、マイネルの運動モルフォロギー的考察法に基づいて印象分析し、比較考察することを中心に進める。筆者が携わってきた投運動であるステップシュートと各種運動の運動類縁性を知ることによって、その運動の学習転移を図り、「投げる」運動の動きの感じを本質的なものにしていく。

### <本論>

#### 第一章 投運動の特性論

一見「手」のみで行われていると考えられがちな「投げる」運動だが、実際は流れるような運動経過の中に全身の様々な動きが存在し、それが手に伝わり投運動として成り立っている。投運動の動きの経過を本質的なものとして共有し、特徴を浮き彫りにして各種スポーツ運動への学習転移を図るためにはそこに運動類縁性を見い出さなければならない。運動類縁性は運動構造（本研究で用いた「局面構造」の他に「運動のリズム」が含まれる）にほとんど大きな違いがない場合にあるとみなされ、「運動類縁性を顧慮は目標に方向づけられた学習を促進し、回り道を免れる」のである。

#### 第二章 運動モルフォロギー的考察法について

運動を見て正確に写し取ったり、運動経過のある特徴を浮き彫りにし説明するためには運動記述が必要とされるが、それには不完全さは免れないものである。また、運動の経過を目で見て感じたことを記述し、特徴を浮き彫りにすることは極めて難しいものであり、それらを本質的なものにしていくためには諸カテゴリーを用いる必要がある。諸カテゴリーとは①運動の局面構造、②運動のリズム、③運動の伝導、④運動の流動、⑤運動の弾性、⑥運動の先取り、⑦運動の正確さ、⑧運動の調和の8つである。運動によって際立つカテゴリーは異なるが、すべてのカテゴリーが相互作用して出来栄の良い運動が成り立っているのである。投運動の運動類縁性をみていくにあたっては、諸カテゴリーのなかでも特に運動の局面構造と運動の伝導を中心に論じていくことにする。

### 第三章 投げかたの運動類縁性に関する比較考察

比較考察法はモルフォロギー的考察法の主要な方法であり、運動を比較考察することによって、運動の差異や特殊さ、共通の徴表や運動類縁性を確認することができる。異なった運動を分析するために①ボールを持つ、持たない、②用具を持つ、持たない、③技術の習熟度、④状況への対応の4点を考慮した。5種類のスポーツ運動は、すべて非循環運動で「局面構造」が①準備局面、②主要局面、③終末局面の3分節である。ハンドボールのステップシュートと他の運動は動きかたが似ているため、そこには運動類縁性を見出すことができる。ステップシュートと他の運動との大きな違いは肘の使いかたである。ステップシュート以外の4種類の運動は構えの時点で肘が大きく曲がっていて、主要局面では肘から前に押し出すように、肘一手首へと力が伝わって、腕全体が“しなり”、鞭のような動きがされている。共通の特徴としては、準備局面から主要局面への移行場面において、すべての運動で胴体の“ねじれ動作”と胴体が反りかえる“弓なりの緊張動作”、また終末局面では、胴体を“ねじり戻し”ながら、腰を前に“運び出して”いることが分かった。

### 第四章 学習転移について

先行学習が後続学習に影響を与えることを学習転移という。運動類縁性のある運動の転移は「類似性転移」に分類される。“動く感じ”が似ている運動は、自分の中に類似の運動感覚があるために共感しやすく、新しい運動を身につけやすいといえる。すなわち、運動類縁性をもつ運動経過が似た運動の学習は、新しい運動の学習を促進し、回り道を免れるとよい。ハンドボールのステップシュートを類縁した運動に学習転移を図ることは、準備局面で主要動作に対する“感じの呼び込み”をするための胴体の動き、“ねじれ動作”、“弓なりの緊張動作”、“ねじり戻し”、腰の“運び出し”といったものが共通していれば可能である。本研究で用いた他の4種類の運動に対して学習転移を図ろうとする場合は、今までの運動感覚に加えて、特に肘から手首を使った鞭のような動き、腕が“しなる”ような、スナップの感覚を発生させなければならない。後続学習では先行学習が負の転移をし、運動の不調和が生じる可能性もある。したがって、指導者は学習者の運動経験を把握し、それを修正する能力や、学習者が新しい運動感覚を統覚し構成できるような支援が求められるのである。

### <結論>

類縁した運動に対しては学習の転移を図ることができると分かった。そのために、学習者には私の運動感覚の取捨選択能力が、指導者には潜勢的に自分の中で運動を行い、学習者の運動の不調和を見抜いたり、学習者に共感する能力が求められるのである。新しい運動を習得するにしろ、運動を修正するにしろ、私の中に類似の運動感覚（運動アナログン）がなければそれは不可能である。すなわち、多くの運動経験のある人は様々な運動をもうまくできるといえるのである。子どもの運動能力の低下、特に投能力の低下が顕著に現れてきている今日。将来各種スポーツ運動に携わった時に、私の運動としてコツを習得するためにも、子どもたちには遊びなどを通して当該種目と運動類縁性を持った動きを経験させ、必要最低限の運動能力を習得させていかなければならないのである。

(引用・参考文献省略)